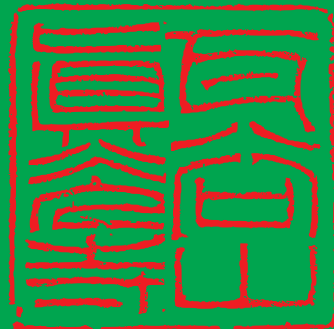




が こと さん 瓦谷山だより

令和7年 3月号

vol. 58

が こと さん
瓦谷山とは、真光寺の山号です。当地に平安時代のカワラケ
(瓦や土器)が出土した事から、この山号となりました。



春のお彼岸、皆さまのご参詣をお待ちしております。

「あいさつ」

真光寺住職 岡本和幸

私が学生時代を過ごした四谷の天龍寺には「時の鐘」がありました。内藤新宿で朝まで遊興した人々を追いつく合図となったので「追いつきの鐘」とも呼ばれ、江戸三名鐘の一つに数えられたこともあったといわれます。江戸から明治へと時代が変わって市中に時を知らせる役目を終え、さらに高度成長によって周辺の都市化が進んだため、私がいた頃には大晦日の除夜の鐘を除いてその音色を響かせることもなくなっていました。

江戸の町に最初に設置された「時の鐘」は、江戸城から移されたといわれる日本橋本石町の鐘で、時代によって設置場所と個数には変化があったそうですが、①本石町、②上野寛永寺、③市ヶ谷八幡、④赤坂田町成満寺、⑤芝増上寺、⑥目白不動尊、⑦浅草寺、⑧本所横堀、⑨四谷天龍寺の順に、前の鐘の音を聞いて順序よく鳴らしていったといえます。この順番を間違えたり、忘れたりしたら幕府からきついお咎めがあったというのですから、相当緊張して務めていたのだと思います。こうした時刻に対する厳格な姿勢が、時間に正確であることを美徳とする日本人気質を醸成したのかもしれない。（参考・セイコーHP）

「夕焼け小焼け」の歌詞のように、どちらかといえば時を告げるイメージが強いお寺の鐘ですが、梵鐘の音に宿る独特の余韻は無常の理を説くかのごとく響くことから仏の声そのものであるとされ、また人々の思いを亡き人へと届ける力を有する特別な音声であるとも考えられてきました。

三途八難 さんずはっなん 息苦停酸 そつくしょうさん 法界衆生 ほっかいしゅうじょう 聞声悟道 もんしょうぶどう

これは禅宗寺院で梵鐘を打つときにお唱えする鳴鐘偈という偈文です。

「三途」は、地獄道、餓鬼道、畜生道という三つの苦しみの世界（三悪道）を指します。地獄道とは何もかも思うようにならない世界、餓鬼道は欲しくてしょうがないのに手に入らない世界、畜生道とは道理がわからない世界をいいます。生きているうちはこうした悪い道へと迷い込んで苦しみますが、生を離ればこれらの悪い世界を超えて欲にとらわれない彼岸へ至るので、人が亡くなると三途の川を渡るといいます。彼岸という阿弥陀仏の西方極楽浄土のごとく、亡くなった人がたどり着

くどこか遠くにある世界ととらえがちですが、苦しみから抜け出し心の寂靜を保つことができれば、今立っていることが「さとり」の岸、すなわち彼岸となります。

仏を見、その法を聞くことを妨げるさまざまな状態や災難を意味するのが「八難」で、災難には飢、渴、寒、暑、水、火、刀、兵の八つが挙げられています。昨夏は暑難でしたし、昨秋には能登半島が過酷な水難に遭い、年が明けた今、ロサンゼルスは火難の渦中にあります。

こうした悪い世界や災難の中で苦しくつらい思いをしているすべての人々が、この鐘の音を聞いてさとりへの道に進みますようにという祈りをこめて梵鐘は打たれるのです。

大本山永平寺では、しばしば「ゆく年くる年」にも登場する大梵鐘を一日に四回鳴らします。打つ前には必ず鳴鐘の偈を唱え、一打のたびに五体投地の礼拝を行います。鐘の重さは五トン、このたび真光寺の鐘楼堂に吊るす鐘が七百キロぐらいですから、とても大きなものです。

永平寺で朝の鐘が鳴るころ、修行僧は暁天坐禪の真つ最中です。坐禪をしながら大梵鐘の音を聞くのはとても気持ちの良いものでした。私自身も修行中に二度ほど撞き、腹に響くような重厚な音の共鳴が波のように寄せては返す荘厳な音色に圧倒されました。ただ時間通りに鳴らすのに精いっぱい、今になってみればすべての人々が災厄に遭うことなく迷いや苦しみから抜け出して、おさとの道へと進むように、また修行僧が弁道に励むようにと願いながら打つべきだったと思います。

昨年暮れに発願いたしました鐘楼堂建設へ、おかげさまで多くの方々から浄財が寄せられておりますことに厚く御礼申し上げます。永平寺では果たし得なかった祈りの心をこめて山寺の鐘の音をお届けするべく、今春より周到に工程を進めていく所存でおります。工事中は何かとご不便をおかけいたしますがご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願いいたします。

今正月から地元の方々と里山の整備をはじめました。今後は月に一回、草刈りや木の伐採、その片付けなどを行っていき、今年中には仮称「袖ヶ浦の里山里田を守る会」を結成し、多くの人にご参加いただけるよう努めてまいりたいと考えています。

間もなく春のお彼岸、そして桜をはじめ百花斉放の季節がやってまいります。皆様の御参詣を心よりお待ちしております。

合掌

行事報告

正月ご祈祷・修正会

お正月三が日の年頭祈祷、三日の午後からは檀信徒の皆さまとともに修正会を厳修いたしました。家内安全、諸願成就、厄除けなどを御本尊様に祈願。三が日のご祈祷には、計一四一名の方々が参列されました。



ご祈祷前に法要の場を净めます



新年修正会

お焚き上げ供養

一月七日の七日法要後は仏殿前にてお焚き上げ供養を厳修。気持ちを整理して、心機一転、新しい年をお迎えいたします。



仏殿前にて読経



住職が火入れします

送迎についてのお知らせ

袖ヶ浦バスターミナルと真光寺間の送迎の注意事項

真光寺では、墓参や各種法要などへのご参列の方の送迎を承っております。原則、ご利用の皆様のご希望日時で、JR袖ヶ浦駅または袖ヶ浦バスターミナルへ職員がお迎えに伺います。（日程、時刻の調整をお願いすることもございます。）

東京、横浜、川崎方面からは、高速バスのご利用が便利ですが、この数年、東京湾アクアラインおよび接続する首都高速の大渋滞が起るようになりました。特にお正月、夏休み、各季節の三連休などは、大渋滞が多発します。

送迎お申し込みのタイミングによっては、JRのご利用に切り替えていただいておりますので、ご了承のほどよろしくお願いいたします。

※送迎のお布施として、お一人往復で千円程度をお納めください。



新しい位牌壇



薬師堂外観

お参りについては、ご注意ください。ただきたい点がございます。薬

は、毎月七日法要の授戒式で授戒された後、または故人とそのご家族が法事で授戒される時です。すでに縁の会会員になっていて、まだお位牌が安置されていない方は是非、授戒式にご参列いただいて授戒なさってください。

縁の会の位牌堂「観音堂」の位牌壇は、昨年末でいっぱいになりました。令和七年一月以降に授戒される方のお位牌は「薬師堂」に設置した新しい位牌壇に並びます。観音堂と同様の漆塗の位牌壇で、お位牌も従来と同じデザインです。お線香もご用意しております。

今後の真光寺伽藍整備事業に伴い、現在の位牌壇を別のお堂に移動する可能性もございますので、ご了承ください。

（お参りの前日までに確認のお電話やラインをいただければ、状況をお伝えいたします。）

薬師堂は、仏殿（本堂）と同じく法要のためのお堂ですので、ご法事やお彼岸、お盆などの大きな法要、ご祈祷を執り行います。皆さまが墓参りに見えた時に薬師堂を使用している場合もあります。その折は、法要が終了するまでご焼香は少々お待ちください。よろしくお願いいたします。

縁の会の位牌「薬師堂」位牌壇へ安置開始

あじさいロード完成顛末記 その六

文・住職 岡本和幸

平成八年夏には檀信徒の皆様からご寄付をいただいて畳を新調し、本堂は見違えるほど綺麗になりました。このとき床下に補強の束を入れ、床が抜ける心配もなくなりました。控室が足りないので六畳のプレハブを購入して「これで準備万端整った」と思った矢先に起こったのが、お彼岸中の豪雨による裏山の崩落です。嘆く暇もないままにトイレを埋め尽くした土砂をなんとか片付け、十月五日の晋山結制法要当日を迎えました。

晋山式とは住職の就任式のことです。まず退董式という先代の住職が引退する儀式を行い、新住職は近隣の御檀家に設けられた安下処に入りまゝす。これは遠い道のりを歩いて入寺していた頃、一度旅装を解いて身支度を整えて式に臨んだ名残りといわれます。その後幟旗を掲げた檀信徒の方々の先導で新住職は寺へと向かいますが、めったにない大法要ですので、地域の子どもたちの幸せと健やかな成長を願う稚児行列などを伴うことも多々あります。お寺に到着後

はご本尊様はじめ各お堂を回り法語を述べて初見のご挨拶を行い、その後須弥壇上に登って集まった僧侶たちと法問（禅問答）を交わして自身の見識と技量を披露します。その後首座和尚が禅問答をさばく法戦式を経て、最後に檀信徒各家の供養法要を行うという、まさに数十年に一度の盛儀です。



晋山結制法要で須弥壇上から法問を交わす岡本住職

この日真光寺には全国から三十五名ほどの僧侶が集まりました。



真光寺檀信徒の皆さま



東長寺檀信徒の皆さま

真光寺の六十軒余の檀家様に加え、東長寺のお檀家様四十名も大型バスで駆けつけてくれました。さらに親族や友人なども合わせると、小さな本堂は立錐の余地もない状態です。そんな真光寺から安下処の鈴木家に伺い、ご当家の供養法要を行っている中、雲行きがどんどん怪しくなると、雨が降り出しました。行列は中止せざるを得ず、さらに法要開始に合わせるかの如くにすさまじい豪雨に見舞われ、雷鳴轟く中での式となったので、ご参集いただいた方はもとより、テントで受付などをしてくださった方々は大変だったと思います。法要が終わると同時に嘘のように快晴となったのには驚きましたが、

あれはきつと天の流した嬉し涙だったに違いないと、吉兆にとらえています。



演奏と踊りをご披露いただきました。役員や出演者と夜遅くまで酌み交わし、最後は泥酔してよく憶えていませんが、忘れがたい一日となりました。

欲張りな私は、東長寺の寺子屋敷のバリダンスの生徒さんと、その関係で知り合った「スカル・ジューブ」というインドネシアバリ島の楽器ガムランの演奏グループにお願いし、この日の夜に公演を企画しました。地域社会へのコミットが足らず多くの観客動員には至りませんでした。素晴らしい

この行事が一段落して再び四谷の東長寺に出勤する日常へと戻りしばらくすると、オーストラリア人の若者クリス・マティウス君が突然東長寺にやって来ました。同じころ東長寺坐禅会に参加したことがあるというオーストラリア人女性から、「人生に悩んでいる若者がいて僧侶になりたいと言っているから東長寺を教えた」という手紙を受け取っていました。そこでいくつかの曹洞宗の修行道場を紹介したりしましたが、どうもそこまでの決心はなく、「なんとかなるだろう」と無計画に渡航してきたようでした。言葉もできず、泊るところもない状態で、仕方なく真光寺で預かり、しばらく様子



真光寺役員、公演出演者との記念写真

を見ることにしました。連れてきたものの、特にやらせる仕事もありません。そこで裏山の竹をとにかく切つて欲しいと依頼して、クリス君は朝から夕方まで裏山で竹の伐採に精を出してくれました。ひたすら竹を伐採して三か月ぐらいはいたように思いますが、ある夜母親を思い出して泣き出すと、吹っ切れたように国内を観光し帰国の途につきました。



真光寺の檀信徒団体参拝旅行で永平寺に連れていったときのクリス君。唯一残る写真です。

切った後の竹をどうするか、当時の私はあまり考えていなかったのですが、クリス君が切った竹は膨大に積み重なり、にっちもさっちもいかないうちに状況が呈していました。困ったときに頼りになるのは役員さんです。早速相談すると檀

家さんたちが総出で片付けてくれたことになって、四日間ぐらいたったと思いますが次々に竹を切つては燃やし、クリス君が伐採したところだけはきれいな山へと変貌しました。深いと思っていた山は意外と浅く、これなら自分でもできると思い、爾来約五年をかけて竹を伐採しては片付けていきました。この間一泊坐禅会の参加者や、ゼミ合宿で訪れた学生さん、ご近所さんなどさまざまな方々のご助力を頂戴しました。この活動は平成二十五年ごろまで続き、現在のはほぼ境内地の全伐に成功しています。

竹害という言葉が聞かれたことがあるかと思いますが、これが全国的な問題になっています。竹は一年でおおよそ二十メートルほど根を伸ばし広がつていきますから、タケノコを採ろうと小さな根を埋めただけでも、山全体が一気に竹林になってしまいます。竹が入った山では、スギなど針葉樹はこすれて用材にならないといわれ、また広葉樹も竹の根に、締められ弱って枯れていきます。真光寺の隣接地は相変わらず荒れた竹林です。で、毎年伐採や草刈りが欠かせません。永遠の戦いですが、春には越境して伸びてくるタケノコがい

ただけです。少しは良い点もあります。

竹を伐採して山を綺麗にしていると、まず木が元気になります。そして山ワラビが生えてきます。さらにエビネやキンラン、ギンランなどの近年絶滅が危惧されている野草なども甦ります。蓮の種が千年経つても発芽するように、山の中でも野草は種や根の状態で待機していて、条件が良くなるのを待って発芽するのだそうです。そうした姿を観察することが楽しくて何とか続けてこられたのだと思います。

かつて私たちの先祖は山の恩恵をいただいて生活をしていました。枝葉は焚き付けに、葉っぱは肥料として毎年集められ、雑草は家畜の飼料となり、竹も日用品やノリいかだとして利用されてきました。そういう需要があったからこそその里山だったわけですが、どんなに希少な植物が生えてくるにしても、利用されなければ、手つかずの荒れ山へと戻っていくことは間違いないと思います。そうした思いが樹木葬墓地の開発へとつながり、アジサイロードへ向かう契機となっていくのです。

合葬墓『桜の苑』を改修しました。

樹木葬の合葬墓として、またたくさんの種類の桜を楽しめる場所として皆様に親しまれてきた桜の苑を昨年末リニューアルいたしました。以前境内で使われていたレンガや、地元の方からいただいた庭石、灯籠も組み合わせ、住職の舵取りのもとお寺の職員で作りました。中でも目を引くのは新しく入手した山形県産の鳥海石をくり抜いて作った巨大な水鉢。たくさんの方がお花を御供え出来るように置かせていただきました。真光寺の新と旧を織り交ぜた新しい桜の苑。是非一度お参りください。

地元の方に
譲っていただいた
溶岩石の灯籠

山形県産の鳥海石を
くり抜いた水鉢。
幅2.4m、奥行き1.1m
高さ70cm、総重量3.3t。

桜の苑の大石。
亡くなられた後は
この下に埋葬され
自然に還ります。

旧桜の苑の献花台。
リニューアル後は
香炉としてお線香を
あげていただけます。



旧桜の苑の舗装に使用
していた焼きレンガ。
元は芸術家の作品の
一部でした。

青石を敷き
詰めた箇所は
水面を思わせます。

旧庫裡に使用していたレンガ。
雰囲気も明るくなり、
歩ける範囲もわかりやす
くなりました。

地元の方からいただいた
青い庭石。お参りの
境界を視覚化しています。

仏教豆知識

「お彼岸の意味」

副住職 國生 徹雄

お彼岸の中日は昼と夜が同じ長さになり、太陽が真東から昇って真西に沈みます。インドで生まれた浄土思想は、西の彼方に極楽という阿弥陀仏の浄土があると説きました。欲や煩惱に満ちたこの世を「此岸（川のこちら岸）」にたとえ、安らかな悟りの世界である「彼岸（向こう岸）」への往生を願う浄土教は中国でも盛んに信仰されましたが、日本では古来の民俗儀礼の影響を大きく受けた独自の「彼岸会（お彼岸）」として、墓参など先祖供養を重視する行事として定着しています。

仏教の重要なお経に「般若心経」があります。このお経を締めくくる「羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶」という言葉はさまざまに解釈されますが、大正時代の曹洞宗僧侶の橋本恵光老師は次のように訳されました。

「ゆきゆきて彼岸をばゆく彼岸をばもろともにくこそ悟りなれ」

「彼岸に往く」のではなく、「彼岸に行く」のです。彼岸は別世界ではなく足下にある、そしてみんなと一緒に歩いてゆくことこそが悟りであるというお示しです。今この瞬間をお釈迦様の教えを指針として歩を進める、その一步一步が煩惱を離れた安らかな世界、すなわち「彼岸」の実現にほかならないということでしょう。

真西に沈んでゆく夕日にご先祖様への想いを託しつつ自分自身生き方を鑑み正していく、そのような機会として年に二回のお彼岸を迎えられたらと思います。

合掌

【連載】上総自然学校フィールドの希少な生き物たち

第十五回・ニホンアカガエル
文・大島 健夫

前回のヤマアカガエルに続いて、今回はニホンアカガエルのお話です。

この二種類はまことによく似ていますが、その見分け方についてはヤマアカガエルの項で記しましたので今回は割愛します。川原井の谷津田では、ふだん、ヤマアカガエルに出会うチャンスが一つあるとしたら、ニホンアカガエルに出会う機会は二十くらいあることでしょう。ヤマアカガエルが繁殖期以外は暗い森林で暮らし、生息数も少ないのに対し、ニホンアカガエルは開けた場所にもよく出てきていて、生息数もぐっと多いのです。

ところが、川原井ではかようによく見られるニホンアカガエル、千葉県レッドリストには「A（最重要保護生物）」として記載されています。これは、近年の全体的な減少率が非常に高いためです。

ニホンアカガエルの生存を危機に迫っているのは、稲作農業の近代化でした。

ヤマアカガエルと同様に、そしてヤマアカガエルよりもやや遅い時期に浅い水たまりに産卵するニホンアカガエルにとつ



目からお尻まで真っ直ぐに伸びた背号線が特徴

ては、冬場に田んぼの水を抜いてしまう「乾田化」は、文字通り繁殖の環境を根こそぎ奪われるものだったのです。加えて、コンクリートの三面張りとなった水路は、昔ながらの土水路とは異なり、一度落ちると二度と這い上がれずに流されてしまう、地獄の川と化しました。千葉県立中央博物館監修による書籍「カエルのきもち」には、そのことが端的にこう書いてあります。

「昔、田んぼはカエルのゆりかごだった。だが今はまるで棺おけのような状態である」

かくして、普通種中の普通種であったニホンアカガエルは、各地で姿を消し、現在では、「いるところにはいるが、いないところには全然いない」生き物となつてしまいました。昔ながらの湿田と土水路、それにため池が残っている川原井のフィールドは、いわばニホンアカガエルの残党たちの砦なのです。

では、仮に日本中の田んぼに冬でも水をためるようにし、水路の三面張り化をやめればニホンアカガエルの個体数は劇的に回復するのでしょうか。それが、実は必ずしもそうとは言いきれないところがあります。

千葉市の郊外にある私の実家の庭には、毎年、ニホンアカガエルが現れてすみついています。ところが、うちの

実家はニホンアカガエルが発生している最寄りの水場から直線距離にして200mくらいも離れ、比高差もかなりある台地上に位置しているのです。このことは、ニホンアカガエルが季節的に移動しながら暮らしていること（それも樹上性のシュレーゲルアオガエルやニホンアマガエルと異なり、純粹に地上のみを移動すること）を示しています。ということは、道路建設や宅地化などでその経路が分断されたり、あるいは逆に耕作放棄や管理不足で非繁殖期に過ぐす場所の環境が悪化したりますと、ニホンアカガエルは、時系列のサイクルにおけるパッケージジとしての生活圏を失ってしまうことになるのです。要するに、ニホンアカガエルを守るためには、「里山の保全」そのものが肝要なのです。

ヤマアカガエルの項でも書いたように、カエルは捕食動物として大量の昆虫を食べる一方、爬虫類や鳥類、両生類の餌となつて食物連鎖のなかで重要な位置を占めています。カエルが減つても里山はびくともしないよ、なんていう人がいたらと



ニホンアカガエルの卵塊

んでもない間違いで、カエルがいなくなるということは、ダルマ落としの真ん中あたりをぶち抜いてしまうようなもので、生態系に著しい悪影響を与えます。これはカエルに限らず、他の生き物であつても同じことです。

ところで、アカガエルを餌としてきたのは何も前述のような生き物たちのみではなく、今、八十歳以上くらいの人に聞くと、アカガエルは食べられ、なかなかの美味だったそうです。脚の部分をあぶって食べたものなのだそうです。食用ガエル、つまりウシガエルがおいしいことは私も知っていますが、アカガエルは食したことがありません。もし食べたことのある方がいらつしやいましたら、感想を教えてください。

ニホンアカガエル
Rana japonica
無尾目アカガエル科
千葉県レッドリスト・A（最重要保護生物）

おおしま たけお

詩人。1974年千葉県生まれ。詩の朗読の日本選手権・ポエトリースラムジャパン2016優勝。パリで開催されたポエトリースラムW杯で準決勝進出。一方でネイチャーガイドとしても活動。千葉市野鳥の会会長、日本トンボ学会会員。環境省希少野生動物植物種保存推進員。近著「そうだったのか！里山のいきもの百物語」（メイツ出版）好評発売中。

【連載】西上総風土記

第3回 佳き年への願い ―正月の祈願と占い―

文・井口崇

二〇二五年の正月を迎えた。正確には年神様（正月様）を迎えたというべきだろう。今回は、西上総の年の瀬から節分にかけての年中行事を紹介しながら、正月について考えてみたい。

年神様を迎える準備

子どもの頃の年の瀬を思い出すと、すす払い、畳の天日干し、障子の張替え、餅つき、門松飾り等の正月を迎えるための支度があつたが、子どもの私にも仕事を与えられていた。家族みんなで働いて、家やその周囲を綺麗にすることに自分も役に立っているという実感があり、楽しかった記憶がある。正月が来るのを楽しみに感じていたのは、身内の帰省やお年玉もあつたが、忙しい大人に混じって、神仏を招くための行事に参加しているという清々しさがあつたからではないかと、今では思える。

『袖ヶ浦市史 自然民俗編』による

と、袖ヶ浦では、正月の準備はススハライから始まる。十二月の中旬から二十八日まで。大安の日か日曜日、或いは天候の良い日を選んで行われた。煤竹は葉のついた女竹二本を束ねて縛ったものを使い、まず、トシガミサマを祀る神棚から始め、仏壇、荒神様などを掃除する。以前は畳を全部あげて、最後には軒下まで入念に行つたところ。また、市内の根形地区ではこの日のことを「正月ハジメ」といい、近所の人々は「おめでとう」とあいさつを交わしたという。

家にやつてくる年神様を迎えるためには、祓（はらえ）とは穢れを取り除くという意味）の行事を行い、年神様が訪れやすいように目印としての門松や玄關飾りを配し、依代（よしろ）としての鏡餅や年神棚を設け、お供え物でもてなすための備えが必要だったのである。

年神様の正体

年神様とは、一年に一度、家や村にやつてくる来訪神であるとされる。また、

家を守ってくれる祖霊神（ご先祖様）でもあると考えられている。地方によつては、正月様、大歳神、お歳徳さん、恵方神などとも呼ばれている。大歳神は穀物神とされ、『古事記』においては、須佐之男命と神大市比売（大山津見神の娘）の間に生まれた神とされている。また、両神にはほかに宇迦之御魂神がいて、こちらも穀物神である。お歳徳さんとは、歳徳神のことで、陰陽道でその年の福德をもたらす神である。その年の恵方（吉方）からやつて来て、家と村に一年の生活の安泰や穀物の豊穰をもたらす大切な神であると信じられてきた。

このように年神様の正体は多種多様である。わが国の古代から続く神道・仏教・道教・儒教などの混交によつて、その姿を現しながら信仰されてきた神であるといえるだろう。正月にやつてきて家を守る年神様は、春になると農作を守る田の神となり、秋の収穫を見守つた後には山へ帰る。そして、また次の年に田の神も祖霊神も山から家や村に下りてくると考えられてきた。日本民

俗学の父といわれる柳田国男は、一年を守護する神、農作を守護する田の神家を守る祖霊の三つを一つの神として信仰した素朴な民間神が年神であるとしている。

大正月・小正月・節分 ～三回の年越し～

心身や家屋敷のことごとくを清浄にして年神様を迎えるのが、正月朔日（ついたち）の正月。この正月を大正月ともいう。年神様を迎え、お供え物をして祀る。そして年神様と同じものをいただく。大正月には、主として家内の無病息災・繁栄などを願うなど、家単位の行事や祈願が行われている。

小正月は、一月十五日の頃をいい、旧正月ともいう。満月の正月。餅を掲ぎ、アズキガユ（今はお汁粉の家もあるらしい）をつくり、年神様に供えた後でいただくといった家単位の行事・習慣もあるが、小正月の行事は、かつての村の暮らし、特に農業に係る神事が多くあり、今でも地域の行事として伝

承されている。

節分は、大寒の末日をいう。かつて一年を春と秋の二つの季節に分けて考えていた頃、春が年の初めであった。その時代は、立春（新暦では二月四日）が新年の初日で、前日の節分が旧年の大晦日であった。したがって、節分も「年越し」ということになり、旧正月同様に多くの行事が行われてきた。各家庭では、マメガラ（大豆の茎）にイワシの頭を指し、それにヒイラギの葉を添えて、門口や戸袋に挿しておく「鬼除け」や「豆まき」を行う。また、節分の夜にはドンド焼きといつて、神社の境内で火を燃やすことが行われている、年々少なくなっている行事だが、このドンド焼きの火にあたりと風邪をひかないとか、燃え残りを持ち帰り、家の底に置いておくと、防火、魔除けになるといわれている。

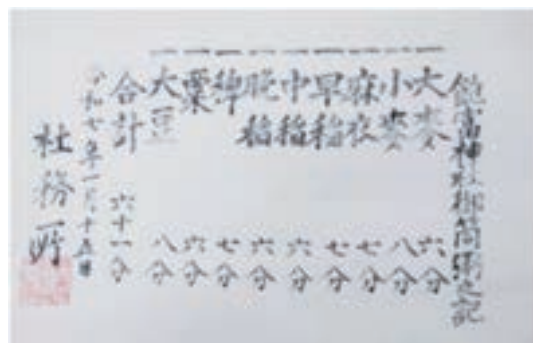
小正月の年占と予祝

袖ヶ浦では、飯富地区の飽富神社、岩井地区の国勝神社に筒粥神事という粥占いが伝承されている。この小

正月に行われる神事は、農作物の出来・不出来について占う（神の意向を伺う）。飽富神社の筒粥（千葉県指定無形民俗文化財）の場合は、古式にのっとり、粥の中に葦の茎を九本束ねたものを本籤と称し、その中に入った粥の量で大麦・小麦・麻衣・早稲・中稲・晩稲・稗・粟・大豆の九種類を占う。これは、村の一年の暮らしを左右する作物の作柄を占う形をとっているが、秋の実りを願い、年の初めに前もって祝っておく、皆で喜んでおこうとするものである。そうした、古くからの願いのかなえ方があり、受け継がれているものと思われる。このようなおこないを予祝という。かつて、この神事の取材に行くと神社の拝殿に、「モメンバナ」とよばれていた、クヌギの枝に小さく丸めた餅を数多く刺したものを占うことができた。この「モメンバナ」は綿の豊作を予祝したものである。家々でもこの「モメンバナ」や「アワボ」とよばれる粟の豊作を祈願した行事が行われていたが、今はもう見ることはできない。

正月はなぜめでたいのか

正月の意味するところは、年神様を迎えて「年を取る」「年を越す」とにある。古くから穀物にも人の命にも「霊」が宿っているとされ、そして、月日の経過とともにその「霊」は衰えていくものと考えられていた。二分した一年のうち六月の晦日と、十二月の大晦日は特に、その霊が弱っている時なので、年神様を迎えて、餅・里芋・雑煮などを供え、そして年神様と同じものを食する。つまり神と同じものを食べるのが正月の食事だったのだ。そうしてこそ、人も田畑も…すべてがその生命力を更新で



今年の筒粥の結果

作柄は、7〜8割程度が良いとされてきた。
今年はやや不作なのだろうか。

きた（そう考えた）。その生命力の更新をよろこび、祝う。そこに、正月の意味があり、「めでたさ」があったのだ。

幾つもの準備を経て迎える正月、そこで繰り広げられる多くの伝統的な習慣・行事はとも懐かしくもあり、生活の知恵も詰まったものだ。最近、また正月が来る！などと思わなくもないし、様々に簡略化してしまっているが、年を取ることに意味があるのだから、ありがたく思うことにしよう。いい歳をとるために、できるだけ日本人らしい心を忘れずに、大切にしていきたいものだ。

いぐち たかし

1956年 和歌山県串本町（本州最南端の町）生まれ。

前 袖ヶ浦市郷土博物館館長。専攻は日本考古学。（日本考古学協会会員）

古代上総国望陀郡産のブランド布で、遣唐使によって唐の皇帝に献上されていた「望陀布」とその紡織技術を研究テーマとしている。

現在は、和洋女子大学非常勤講師。

令和7年 春彼岸法要のご案内

3月20日(木・祝) 11時より 縁の会法要
14時より 檀信徒法要

毎年恒例の「春彼岸法要」を厳修いたします。
皆様のご参加、山内一同、心よりお待ちしております。

※塔婆供養をされる方は事前にFAX・LINEまたは
お電話でお申し込みください。
※縁の会法要にご参加の方は、下記をご確認の上、
事前にお申し込みください。



「縁の会 春彼岸法要」お申し込みについて

下記をご確認の上、お電話またはLINE、メールにてお申し込みください。

①ご参加の人数 ②送迎の要・不要 ③お弁当の要・不要(お弁当代として1,000円程度のお布施をお包みください。) ④花とうばのお申し込みは同封の「花とうば供養申込書」をご利用ください。

行事予定

【縁の会会員様対象】

七日法要

11時より授戒式・月例供養法要。昼食(精進料理)を挟み、午後は坐禅・写経からお好きなものをお選びいただけます。4月の午後の行事は、植樹祭を行います。年に1度だけ開催するこの植樹祭は、ご自身の区画に苗木を植えていただけます。苗木はすべてお寺でご準備いたします。ご希望の方は是非ご参加ください。7月の盆施食法要の詳細は次号6月発行の瓦谷山だよりに掲載いたします。

※要事前申込

※午前、午後のおのみの出席もできます。

日時：3月7日(金)

4月7日(月) ※午後は植樹祭

5月7日(水)

6月7日(土)

7月7日(月) ※午後は盆施食法要

全日午前11時より。

昼食(精進料理)付き。

(4月7日、7月7日の昼食はお弁当をご用意いたします。)

戒名を考える会 ※縁の会会員 特に未授戒の方

午前中は戒名の意味や意義、仏教知識について学びます。精進料理の昼食をはさみ、午後は住職といっしょに、漢和辞典を引きながら実際にご自身の戒名を考えます。

※要事前申込

※持ち物：漢和辞典

日時：3月6日(木) / 9月11日(木)

午前11時より午後2時30分

参加費：3,000円(昼食付) 定員：10名

バス見学会を墓参にご利用いただけます。

東京駅：3月30日(日) 4月6日(日)

5月18日(日) 6月22日(日)

千葉駅：3月29日(土) 4月5日(土)

5月25日(日) 各日程10時出発

ご利用方法

◆事前予約制 お申し込みの方に詳細をご案内します。

◆1組3名まで ◆費用：千円 / 1人(弁当代)

・お気持ちでお布施をお願いします。

次号Vol.59号の発行は6月中旬頃を予定しています。
次号にて年会費のお振込み用紙を同封させていただきます。

行事予定

【檀信徒様対象】

花まつり檀信徒総会

お釈迦様の誕生をお祝いし、法要後に檀信徒総会を行います。当番地区：根澄山

日時：4月6日（日）11時より

【どなたでも参加できます】

精進料理と聖典講読の会

午前11時より住職によるお経や仏教解説を行います。精進料理の昼食をはさみ、午後は坐禅や写経を行います。
※要予約

日時：3月12日（水）/4月21日（月）/5月20日（火）/
6月17日（火）/7月9日（水）
全日午前11時～午後2時30分

参加費：3,000円（昼食付）



ご詠歌練習日

ご詠歌はお釈迦様、お祖師様の教えや、亡き人を偲ぶ心を詞に表し、音楽に乗せてお唱えするものです。初めての方にも丁寧に指導いたします。

日時：3月11日（火）、25日（火）/4月8日（火）、22日（火）
5月13日（火）、27日（火）/6月10日（火）、25日（水）
7月8日（火）、22日（火）
全日午後3時～午後4時30分

参加費：無料

ラインご利用いただけます
ご祈祷、ご法事、各行事、塔婆、
住所変更等のお申し込みお問い合わせは真光寺LINEでもお申し込み
頂けます。 [ご登録用QRコード](#)➡



【どなたでも参加できます】

坐禅会

初心者の方も気軽にご参加下さい。初めての方は坐り方の指導をいたしますので、午後2時30分までにお越し下さい。

日時：毎月 第2・第4土曜日
午後3時～午後4時30分

布施：500円程度

写経会

写経は祈願・供養、精神を落ち着けるため、お経を書写するものです。夕照庵（小書院）にテーブルと椅子を置きました。ゆったりとした静かな空間で、心を整えて写経ができます。

※道具は用意してありますが、ご持参されても結構です。

※要予約

日時：3月7日（金）/3月12日（水）/4月21日（月）
5月7日（水）/5月20日（火）/6月7日（土）
6月17日（火）/7月9日（水）
全日午後1時～午後2時30分

布施：1,000円程度



仏像彫刻体験教室

日時：毎月 第1・第3水曜日
午後1時30分～午後4時30分

費用：1回4,000円

※初回の方は要事前申込

お申し込みは仏師 鈴木先生まで
（TEL. 0438-63-2848）

令和七年 年回表									
百	五十	三十	三十	二十	二十	十七	十三	七	一
回	回	回	回	回	回	回	回	回	周
忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌
大	昭	昭	平	平	平	平	平	平	令
正	和	和	成	成	成	成	成	成	和
十	五	六	五	十	十	二	二	三	五
五	十	十	年	一	一	十	十	十	六
年	一	年	年	年	年	一	一	一	年
		平成元年						令和元年	

年忌法要の確認にご参照ください。

真光寺と駅、バスターミナル間の送迎もありますのでご希望の方は裏表紙をご参照ください。

団参旅行のご案内

真光寺お花見と房総古刹めぐり

一泊二日の旅

四月二日(水)・三日(木)

波の伊八 彫刻観覧



飯縄寺



行元寺



この時期、真光寺では桜が満開を迎えます。年々立派になる桜の木々が織りなす白とピンクに彩られた境内をお楽しみください。一日目の昼食は南房総の人気店、漁協直営食堂の房総海鮮料理。鴨川の曹洞宗寺院を参拝の後、夜は三日月ホテル安房鴨川にて楽しい懇親会。二日目は波の伊八の彫刻をもつ寺院参拝につづき、子供たちの和太鼓演奏と盛りだくさんです。詳しくはお問い合わせください。

送迎のご案内

【午前】

□電車の方

- ・上り電車の方(君津発千葉行き)
JR内房線「袖ヶ浦駅」10時05分着
- ・下り電車の方(快速君津行き)
JR内房線「袖ヶ浦駅」10時10分着

□バスの方

【土日祝】

- ・品川発9時00分→袖ヶ浦BT 9時52分着
- ・横浜発9時00分→袖ヶ浦BT 9時46分着
- ・川崎発9時15分→袖ヶ浦BT10時17分着
- ・新宿発8時30分→袖ヶ浦BT 9時35分着
- ・東京発9時10分→袖ヶ浦BT10時05分着

【平日】

- ・品川発9時00分→袖ヶ浦BT 9時52分着
- ・横浜発9時00分→袖ヶ浦BT 9時46分着
- ・川崎発8時30分→袖ヶ浦BT 9時27分着
- ・新宿発8時30分→袖ヶ浦BT 9時30分着
- ・東京発9時10分→袖ヶ浦BT10時05分着

【午後】

□電車の方

- ・上り電車の方(快速逗子行き)
JR内房線「袖ヶ浦駅」13時05分着
- ・下り電車の方(千葉駅発木更津行き)
JR内房線「袖ヶ浦駅」12時50分着

□バスの方

※新宿発、土日祝の午後の送迎は高速バスが停車しなくなったため無くなりました。

【土日祝】

- ・品川発12時00分→袖ヶ浦BT12時52分着
- ・横浜発12時00分→袖ヶ浦BT12時46分着
- ・川崎発11時30分→袖ヶ浦BT12時32分着
- ・~~新宿発00時00分→袖ヶ浦BT00時00分着~~
- ・東京発11時40分→袖ヶ浦BT12時35分着

【平日】

- ・品川発11時50分→袖ヶ浦BT12時42分着
- ・横浜発12時00分→袖ヶ浦BT12時46分着
- ・川崎発12時00分→袖ヶ浦BT13時02分着
- ・新宿発11時30分→袖ヶ浦BT12時35分着
- ・東京発11時40分→袖ヶ浦BT12時35分着

袖ヶ浦バスターミナルと真光寺間の送迎について、お願いと注意事項がございます。
詳細は3ページをご参照ください。

各種お申込み連絡先

曹洞宗 真光寺 〒299-0201 千葉県袖ヶ浦市川原井634
TEL. 0438-75-7414 (代表) / 0438-75-7365 (縁の会事務局)
FAX. 0438-75-7630 Email. ennokai@shinko-ji.jp (縁の会)

瓦谷山だより

発行日 2025年2月20日 / 発行人 真光寺 岡本和幸
印刷 現代社 / 編集 真光寺
問い合わせ先 真光寺 TEL 0438-75-7414 (代表)
Webサイト <https://www.shinko-ji.jp/>